

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 西洋史学専修 2年 佐守真帆

今回の研修ではハイデルベルク大学・ストラスブール大学の研究環境を見学し、両校の学生や教授の皆さんと議論や交流を行った。ハイデルベルクでの諸活動も非常に興味深いものであったが、ここではストラスブール大学での活動について主に報告を行う。

まず、以前ストラスブール大学へ留学されていた京都大学博士一回の横田さんの案内でストラスブール大学のキャンパスを見学してまわった。広大なキャンパスの中には学部棟が点在していたほか、日本の大学ではあまり見かけない語学学校という施設も存在した。この語学学校は、留学生などフランス語がまだ十分に運用できない学生を主な対象とする施設だそう。フランス語がうまく話せない状態で留学したとしてもこの語学学校できっちりと語学教育を受けながら講義を受けることができるという点は、語学力の面から留学をためらっている学生にとっては非常にありがたいことだろう。他にも留学生向けのセンターや留学生でも入居できる学生寮など、留学生のための施設が整っているという印象を受けた。

その後ストラスブール大学日本語学科修士課程の皆さんとの交流や発表を行った。交流会では一緒にランチをいただきながら、ストラスブール大学の皆さんの日本への興味内容や互いの研究についてなど、ざっくばらんな会話が行われた。ハイデルベルク大学の学生さんもそうだったが、ストラスブール大学の学生さんについても「日本のアニメ、漫画」という方が意外に多かったことが印象に残っている。その後、京都大学からは本研修のテーマでもある「移民、難民」に関する発表、ストラスブール大学からは日本の女性運動家についての発表と日仏間の学校制度の差異についての発表が行われた。ストラスブール大学の皆さんとの会話はすべて日本語で行われたが、大学に入ってから学び始めたとは思えないほどの流暢な日本語を話す方も多く、非常に驚かされた。

この研修を経て私は「外国語を聞き、話せること」の重要性を再認識させられた。今回の研修の中で私は、英語ができないがために相手の言うことをなんとなくでしか理解できなかつたり、自分の考えを完全に伝えられなかつたりという場面を多く経験した。一方、博士課程のお二方は英語の他にドイツ語やフランス語をも駆使して様々な方とコミュニケーションを行っていらつした。もし私が他言語を駆使できていれば、この研修で私が得られるものはまた変わっていたはずである。ある程度学問の世界を深めていくためには外国語、特に英語が話せることが不可欠になっているということなのだろう。今後は英語を有効なコミュニケーションツールとして使えるような学習をしていきたい。